皇族の立山登山の嚆矢
—大正８年(1919)、東久邇宮稔彦王の立山登山について—

岡田　知己

はじめに

立山博物館では、平成20年に特別企画展「大衆、山へ－大正期登山ブームと立山－」を開催した。特別企画展「大衆、山へ」は、全国的に登山ブームが到来し、立山にも多くの登山者が訪れた大正後期から昭和初期、立山を巡る「登山環境」の変化について、当時の新聞記事資料を中心に紹介した企画展であった。

ちなみに「大正期に大衆登山ブームが始まった」との状況認識は、登山史研究家布川欣一氏の論を嚆矢とするものである。布川欣一氏は、平成17年に著書『目で見る日本登山史』（山と渓谷社）の中で、1910～20年代の登山状況を「大正登山ブーム」と表現した。特別企画展「大衆、山へ」は、その布川氏指導のもと開催された。

この大正期登山ブームを生んだ社会的背景には様々なものがあった。日露戦争後から男子普通選挙法成立までの約20年間、まさに「大正デモクラシー」の言葉通り広い分野で民主主義運動が行われてきた。その一方で米騒動、労働争議、関東大震災などもあった。大正期を通じて、広範な大衆による多様な活動が盛り上がり、日本社会は一つの「リベラル」な空気を醸し出していた。そのような社会情勢の中で、人は山を目指すようになったのである。

人々は浅ましい日々の日常生活の慰安に、自らの余暇及び休日の楽しみとして、山岳趣味や登山活動を行った。そして、そのような登山や山旅へと誘う媒介として、多彩な活字メディアが続々と登場した。はじめは、『山岳』のように会員限定であり、一般向け山岳雑誌は未刊であった。そのため紀行文やガイドブックが頼りにされていた。その後、高頭式や小島烏水らにより実用性を備えた刊本が発行され、さらに大井冷光などの登山愛好の文筆家による山岳紀行が大きな影響を与えた。そして、現在のスタイルに近いいわゆるガイドブックが大量に出版されたのである。

このような動きに、さらに鉄道、バスなどの交通機関の発達と、登山道の整備・開削、山小屋の開業、山案内人の充実など現地の受け入れ態勢も充実していった。これらの相乗効果が登山者を誘い、登山者が増加、登山者の増加がさらに交通機関や受け入れ態勢を進展させたのである。

この登山ブームの波は、皇族にも及んだ。「山に登る宮さま」たちが登場したのである。立山や剱岳にも多くの皇族が訪れた。皇族の登山の様子は当時の新聞によって大きく報道され、大衆の関心を呼ぶことになる。それは、登山というスポーツが、皇族も楽しむ健全にして高尚な活動であり、山岳が決して危険な場所ではないという強いメッセージとなって、大衆に伝播したのであろう。皇族登山のために整えられた登山道や新たな宿泊施設の開設なども相俟って、さらに多くの人々を山へと誘う一因となった。

皇族による初の立山登山は、大正８年の東久邇宮稔彦王（ひがしくにのみやなるひこおう）といわれている。大正８年７月28日付「高岡新報」は、「▼東久邇宮殿下　御登山　回明朝御出發＝御日程定まる」の見出しで、「金澤歩兵第七聯隊第一大隊長に在（おわ）す東久邇大隊長宮殿下には豫（かね）て山岳跋渉に趣味深く在らせられ、今回立山御登山の計劃ある事既報の如くなるが愈明二十九日七時四十九分金澤驛發…」と、いよいよ日程が決定して明日発することを、写真入り記事で報じている。予定では、７月29日金沢駅発、滑川駅にて立山軽便鉄道に乗り換え、五百石駅下車。徒歩で芦峅寺まで向い、佐伯静邸にて宿泊。30日芦峅寺出発、同夜室堂宿泊。31日頂上雄山神社参拝のうえ下山、立山温泉宿泊。８月１日帰京とある。記事の最後には「…因みに立山に皇族の御登攀あらせられしは今回を以て嚆矢とす」とあり、大正８年の東久邇宮稔彦王の立山登山が、皇族による初の立山登山である

ことを新聞は伝えている。

大正期には他にも４名の皇族が、立山を訪れている。大正10年には朝香宮鳩彦王が立山と剣岳に登頂、また大正13年の秩父宮雍仁親王は、皇族としては最初の積雪期の立山登山であった。他にも竹田宮恒徳王および北白川宮永久王が大正15年に劔岳と立山にそれぞれ登頂している。平成29年度後期特別企画展「宮様、山へ－大正期登山ブームのなかの皇族登山－」は、このような皇族による登山が、立山の登山環境にどのような影響を与えたのか、また大正から昭和初期における立山の登山ブームともいえる登山者の急増とどう関係があるのか、当時の新聞資料ほか新出の写真資料、映像資料などを交えて紹介した。

本稿では、皇族による初の立山登山であった東久邇宮稔彦王の立山登山（大正８年）について、地元新聞の随行記事を中心に紹介し、皇族の立山登山の嚆矢の実際に迫りたい。布川氏によれば、皇族登山も「大正登山ブーム」を膨らませた要因の一つであった。大正期登山ブームを駆動するさまざまな要因の中の一つであった皇族登山、その最初である東久邇宮稔彦王の立山登山を紹介する。

１．東久邇宮稔彦王＜1887－1990＞

『国史大事典』によれば、東久邇宮稔彦王は、「大正から昭和時代にかけての軍人、政治家。明治20年（1887）12月３日久邇宮朝彦親王の第９男子として生まれ、明治39年東久邇宮家を創立して東久邇宮稔彦王となる。妃は明治天皇の第９女子聡子（としこ）内親王で、大正４年（1915）結婚。明治41年に陸軍士官学校を卒業して歩兵少尉に任官、大正３年に陸軍大学校を卒業。大正９年に少佐で32歳のときフランスに留学し、自由な生活にふれてそのまま７年間帰国せず問題となっていたが、大正天皇が死亡したため昭和２年（1927）１月ようやく帰国した。…」とある。また「…皇族の中ではリベラル派とされ、開戦前の首相候補に上ったこともあった。昭和20年８月ポツダム宣言受諾に伴い、鈴木貫太郎内閣が総辞職したあと内閣を組織し、降伏文書調印や戦後処理を担当した…」との記述の通り、昭和20年８月17日、わが国憲政史上最初の皇族内閣として東久邇宮内閣を組閣し、内閣総理大臣の重責を担った。国内秩序の維持と連合国軍の日本本土進駐の受入準備、さらに降伏文書の調印という一連の重要課題を混乱なく完了したが、占領軍の早急な民主化政策の要求についていけず、わずか２ヶ月（54日）で総辞職した。その後、昭和21年に公職追放、昭和22年には皇族の身分をはなれて臣籍降下している。首相就任後の昭和20年８月28日の記者会見では敗戦の責任について「全国民総懺悔」を呼び掛けた。いわゆる「一億総懺悔」論である。この言葉は流行語にもなり、国民の間に戦争責任論を呼び起こした。平成２年（1990）１月20日没。享年102歳である。

東久邇宮稔彦王は、戦後最初の内閣総理大臣であり、わが国最初の皇族内閣として教科書にも必ず登場するなど、歴史上の人物としても著名である。その東久邇宮稔彦王が、大正８年立山登山に訪れた。大正７年７月に東久邇宮は、少佐に昇進すると同時に、石川県金沢に歩兵第７連帯大隊長として赴任している。その後、大正８年11月までの約１年半、金沢での生活が続いた。金沢での生活が誠に居心地が良かったのか、著書『やんちゃ孤独』には「金沢は住みよいところで、さすがに加賀百万石の城下だけあって、人の気持ちも非常になごやかでした。…金沢の人たちは非常に気がきいていました。大変さばけていて、なごやかな気分でした。…」とある。金沢では、乗馬などの戸外スポーツや立山、白山への登山に熱中するなど、楽しいひとときを過ごしたようだ。『やんちゃ孤独』によれば、金沢での住まいは、学習院及び陸軍士官学校の先輩で懇意にしていた旧金沢藩主家の当主、前田利為侯爵の屋敷を借りていたとある。

また、『やんちゃ孤独』には、「登山熱にうかされる」との題で、大正３年11月に仙台へ赴任してから、大正９年４月にフランスへ留学するまでの間のこととして、山登りに熱中したことが記されている。仙台では磐梯山に登っており、『山桜特別号－學習院登山史（Ⅰ）』によれば、大正５年に槍ヶ岳から大天井岳、燕岳を縦走、大正６年には白馬岳を訪れたとある。さらに、大正８年に立山を訪れており、時期は確認できなかったが、この金沢時代には白山にも登っていることが記されている。

『やんちゃ孤独』のなかで、東久邇宮稔彦王自身は「私がはじめて日本アルプスに登山したかどうかはわからないが…」と述べているが、『山桜特別号－學習院登山史（Ⅰ）』は、皇族最初の登山は、明治33年（1900）８月13日、久邇宮鳩彦王（のちの朝香宮）・同稔彦王（のちの東久邇宮）による「富士山登頂」としており、幼少より登山活動を重ねていたことは間違いないようだ。まさに「山に登る宮様」の先魁であった。

２．「東久邇宮殿下　隨伴記」が報じた皇族初の立山登山

東久邇宮稔彦王の立山登山について、「高岡新報」には、大正８年８月４日から14日まで９回にわたって、随伴記者坂口弩水による「東久邇宮殿下　隨伴記」が連載されている。当時、富山県内の有力な新聞は「富山日報」、「富山新報」、「北陸タイムス」、「高岡新報」の４紙であったが、このうち「高岡新報」は、北陸探険団を結成して立山登山や秘境黒部峡谷探険など多くの山岳探険を主催した井上江花が主筆を務めていた。大正期には、江花自身が山岳探険に出かけることはなくなったようだが、黒部への愛着は生涯変わることなく、毎年夏になると「高岡新報」の紙上には黒部に関する記事が登場する。

以下、高岡新報の９回にわたる「東久邇宮殿下　隨伴記」の全文を記し、当時の立山登山の実態を紹介したい。

２－１　▼東久邇宮殿下　隨伴記　坂口弩水　「高岡新報」大正８（1919）年８月４日　２面

△滑川驛にて立山輕鐵に乘換へ終点五百石驛に下車したのは七月二十八日（二十九日の間違いか？）の正午近くであつた、夫れは東久邇宮稔彦王殿下が立山御登攀の為め御發程ありし當日である

▲此の日、五百石町では全町悉く國旗を掲げ頗る靜肅に御成を俟つてゐた、驛前から本通筋には軍人分會員、消防組合、青年團員、學校職員生徒、官公衙員、一般拝觀者等は切間なしに整列してゐた　旋て列車を御捨になつた殿下は鼠色の折襟服に麥藁帽、白靴と謂つた至極輕装にステッキを執らせ給ひて靜かに御歩を進められ直ちに驛前から二人曳の俥に御乘、隨員は金井事務官と祖式属、縣廳よりは案内役として近藤森林技師、舟崎警部、平山縣醫、小國技手の四名であつた、

▲斯くて御一行は**腕車**を連ねて五百石小學校に入り御晝餐や松の御手植等があつてから間もなく立山村岩峅、前立堂迄御成、此所にて白リンネルの折襟服にキツトの黒靴、卷ゲートル、それに**經木眞田**の大鍔の帽を冠らせ給ひ御乘馬にて御出發あらせられた、

▲御召馬は前日來美食を與へ過ぎた爲か精力旺盛、ピンピン跳ねくり廻るのみで容易に進まない、殿下にはもどかしとてか馬を捨てゝ御徒歩となられた、斯くて激流巖を嚙む常願寺川に沿う蹟先上りの阪路を進ませ給ひ途中近藤技師より龜岩や千垣村の故事を御聽取あり、沿道に奉送迎して居る軍人分會員や小學校生徒には叮重な御會釋を給はつた、

▲午後四時頃芦峅寺御着、老杉鬱蒼たる雄山社祈願所前にてご休憩記者は殿下今次の御壯途は我が越中の光榮であるから御隨行の儀を願出てた、殿下には記者が『高岡新報記者』なる事を事務官を經て御聽取あつた後ち御気輕に『此方で休め』との難有き御語を下された、記者は恐懼して殿下に**咫尺**し**御聽勅**の旨を拝承し身に餘る光榮を負ふて殿下御旅館たる佐伯靜方へ投泊した、

腕車…人力車
経木真田…経木を細く切って真田ひものように編んだもの。夏帽子などの材料に用いる。
咫尺（しせき）…貴人の前近くに出て拝謁すること。
聽勅（ちょうきょ）…聞き入れて許すこと。ききとどけること。

当時の鉄道は、北陸線については明治41年には富山－魚津間が開通し、明治43年には泊駅まで延長して

いる。さらに大正２年には、立山軽便鉄道の滑川ー五百石間が開通した。随行記事の通り、大正８年当時においては、五百石駅まで鉄道が整備されており、東久邇宮稔彦王も金沢から北陸線と立山軽便鉄道（大正６年、立山鉄道と改称）を乗り継いで立山登山に訪れたと考えられる。

ちなみに東久邇宮の登山姿であるが、随行記事では白リンネルの折襟服に黒靴、巻ゲートル、それに経木真田の大鍔の帽子とある。若干の相違はあるが、写真①の白馬岳登山時とほぼ同じような姿であったと思われる。

随行記事には、「御召馬は前日來美食を與へ過ぎた爲か精力旺盛、ピンピン跳ねくり廻るのみで容易に進まない、殿下にはもどかしとてか馬を捨てゝ御徒歩となられた、」と記されているように、五百石小学校から芦峅寺までは、馬で移動の予定であったが、あまりにも馬が元気すぎたため、徒歩にかえたとある。このことについて『やんちゃ孤独』では、「私が越中の立山に登った時です。電車の終点（五百石駅か？）から立山の登山口（芦峅寺か？）まで、私が乗馬が好きだというので、村から馬を貸してくれたのです。それが種馬だったのです。村の人が雌馬に乗って先導したので、私の馬がぴんぴんはねて、閉口したことがあります。」とユーモアを交えて述べている。

写真①　「白馬の東久邇宮」大正６年（1917）
画像提供：松本市立博物館

２－２　▼東久邇宮殿下　隨伴記（二）　坂口弩水　　「高岡新報」大正８（1919）年８月５日　５面

▲記者が宿は佐伯某と稱する女主人の尼寺地味た坊で縣の隨員と一緒であつた、其の夜は近藤技師の采配で小國内藏守や平山大膳職、途中から隨伴した杉木大尉等總掛りで夜半過迄鷄五羽、卵百個以上、草鞋が百足等と明日の準備に忙殺されて居る、記者は**無聊**の餘り爐邊に居た村の若衆を捉へて土地の風習を聞いて見たが些して變つては居ない、夫れも其の筈、富山へ五里餘、五百石へ三里半位、只だ米價が常に東京と同値なること芦峅寺の山間平地から収穫する米は總數百二十餘戸の三分の一を養ふに足らない加ふるに夏期の登山者が年々一千人近くある爲め一層不足となる、その不足の分は附近の町から供給を仰ぐ爲め非常の運賃を支拂ふ之は交通不便な土地の**通有**としても卵や草鞋の五錢には少々驚かされた

▲又た同地は十月の末から雪を見て三四月頃迄寢雪となるのが常で其の間は爐に木の株を燻べて賭事に耽る、雪融を俟つて男は出稼し女は農事に鞅る、夫れから登山者の宿は五七年前迄は個人々々の名義で營業したが此の頃は營業税を幾分免がるゝ爲めに代表者三名の名義で營業し各戸を其の分室の如く裝ひ何號室々々と號し宿舍割事務所から一人々々其所へ案内する等土地の人間も大分狡猾である、

▲記者は此の話を聞えて居る間に近藤技師は明日殿下が御登山の沿道にある名勝名勝の説明を豫習して居る、夜中から振り出した雨は二時頃晴れたらしい、一行は少し眠ついたかと思ふと早や三時過ぎ蚊帳を抜け出て旅裝を爲し食を喫して殿下の御旅行に伺候したのが四時であった

▲御旅舘に充てられた佐伯靜君の邸宅は道より十尺位の高台で昨年新築せられた一寸田舍に見られぬ立派な建方である、暫し待つて居ると祖式属は立山村長佐伯新之氏と記者に對して拝謁を仰付られますから來いとの案内を受けたので奥まつた座敷に面した庭先で御待してゐると殿下には昨日と御同様の御輕裝で金井事務官を隨ひさせられて拜謁を賜ひ御見送に出た主人靜君に對しては『皈りに又た邪魔をするから』との御言葉を殘された儘御出發になつた、一行も直ぐ扈從した

▲夜は次第に明けた、嵐氣は肌を拂ふて稍冷涼を覚える、誰やらは殿下日和だと口走つた、常願寺の流に沿ふた道は所々に缺所が出來て冷汗を催すことが數次である、此の邊で近藤技師は

富山縣の地質は頗る杉の木に適して居るにも拘はらず割合に植樹を見ないのは維新前には杉の用途が廣い爲め一朝有事の際に備ふべく七木禁止の制を布き杉を始め其の他六種の木を濫りに伐採せしめなかつた故に一般民は伐ることの出来ない木を植樹するよりも他の木を植うるの利あるを以て杉に對しては放任主義を採つたのと今一つは交通不便の爲め販路が縣下に限られ居た等は主因でありませう、然るに近時價格の騰貴と需要の増加に依つて杉の植樹も漸く甦つた様な次第で

等と附近一帯の植林を指して一々御説明申し上げて居た

訂正　昨紙隨員一行が殿下の御旅館に投宿した如く記したのは誤り

無聊（ぶりょう）…退屈なこと。

通有（つうゆう）…同類のものに共通して備わっていること。

２－１の「隨伴記」によれば、随行記者坂口弩水の宿所は、東久邇宮稔彦王と同じ当時の芦峅寺村総代であった佐伯靜宅であったが、「隨伴記（二）」の通り、実際は佐伯某と稱する女主人が経営する尼寺のような宿坊に富山県からの随行員とともに宿泊している。坊の特定はできなかったが、女性が主の宿坊があったことは注目すべき点であろう。

次に、「隨伴記」に登場する２人の人物について述べたい。まず金井事務官であるが、東久邇宮家付事務官の金井四郎と推定される。宮家付事務官とういう役職は、宮家において家政の責任者である別当につぐ地位であり、宮内大臣が任命し、官吏の中でも中級の奏任官の身分である。浅見雅男著『不思議な宮さま　東久邇宮稔彦王の昭和史』によれば、当時、東久邇宮家は別当が空席であり、実質的な東久邇宮家家政の責任者は金井が務めていたようだ。

もう一人は、森林技師の近藤である。「隨伴記」には何度もその名が登場するが、大正８年７月31日付「高岡新報」には、「技師 近藤茂吉」とフルネームで記されている。近藤茂吉といえば、日本山学会名誉会員で日本アルプス開拓期に剱岳や黒部を舞台としてすぐれた足跡を残した千葉県出身の登山家が著名である。近藤は、この年（1919)、初代佐伯平蔵の案内で、剱岳から仙人谷を下って黒部川に出て、牛首尾根を登って鹿島槍ヶ岳を越え、北アルプス北部初横断を成し遂げている。「高岡新報」に登場する近藤茂吉は、富山県の森林技師であり、東久邇宮の案内役として県庁から派遣されているが、日本山岳会の近藤茂吉が富山県で奉職した事実は確認できず、同姓同名の別人と推定される。その森林技師近藤が、常願寺川周辺の杉の植林状況について、明治維新前、富山は地質が杉の木に適しているにもかかわらず植林割合は少なかったが、最近は木材の価格の高騰による需要の増加で杉の植樹が増え、ようやく甦ってきた、と説明している。

２－３　▼東久邇宮殿下　隨伴記（三）　坂口弩水　　「高岡新報」大正８年（1919）８月７日　１面

▲殿下は右手に金剛杖を突き左手は絶えず腰の邊へ輕く當てゝお出になつた、夫れは軍人に好く見る態度で刀の柄を握る習慣から來る無意識の動作である、旋がて殿下は敏くも常願寺本流が稱名川の流れに比して非常に濁つて居ることに御眼を止めさせ給ひ其の何故なるかに就き御質問があった、近藤技師は湯川一帯の砂防工事が七月上旬の水害で多大の被害を蒙つた結果である旨を申上げた、尚ほ立山火山の往事や常願寺川の流質に就いて知って居ることを詳細に御説明申上て居た

▲斯くて殿下は藤橋を渡り路傍の石垣に御腰を休めさせられた、其の間近藤氏は御側近くに進んで橋畔に建てられた碑文『**立山の南無とからめし藤橋を踏みはづすな彌陀の淨土へ**』に就いて

往時弘法大師が登山の際此の川を渡らんとしたけれども橋がなく頗る困つて居た、時に一匹の山猿が現はれて藤蔓を咥ひ自ら橋を架けて呉れた、大師大に喜び對岸に渡って之れを顧みた時足場になって居た藤蔓は南無阿彌陀佛の六字の名號に絆まれて居た

との故事を審かに申上た、此の橋も數年前迄は未だ吊橋であったが今は上流砂防工事道路として頗る完全な橋が架けられて只だ藤橋の名に昔の面影を偲ばしむるのみである

▲この時記者は殿下の御許を得て御英姿を謹寫した、御休憩約三十分、殿下には成るべく見る所の多き道を撰ぶ樣との御思召であつたから此所から直ちに黄金坂に道を採る、草生坂、材木坂、美女坂と次から次ぎに續いた坂は名こそ變れ九折に造られた急角度の峻坂で邊り一面は幾千年を經たかと思はれる欅の老木が鬱蒼として晝尚ほ暗き迄に茂つて居る、近藤君の足がトモすれば殿下の御頭に觸るゝ慮れあるので狼狽すること數次

▲途中近藤技師は欅材に關して種々御説明を申上げたが遉は森林が自分の畑であるから却々譯しい、殿下も此の方面に趣味多く渡らせらるゝと見えて最近の用途や造林及び國有林の拂下方法、國有林編入の秩序等に就き御質問あらせられ尚ほ北海道や秋田邊の例を引用して反問し給ふこともあった、近藤君これに御答ひして

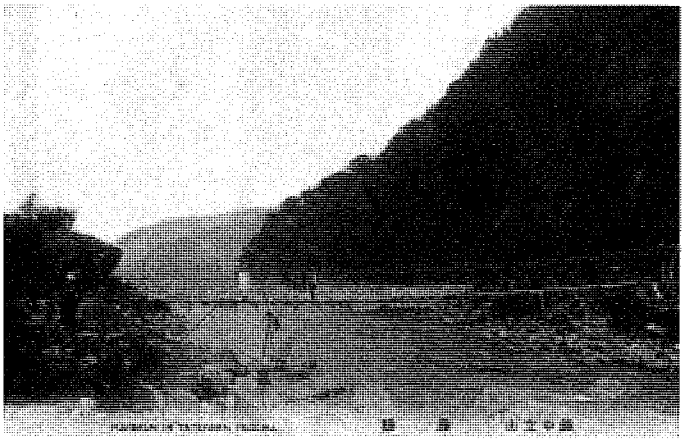
戦前は木材の價が概して安かつた爲め豫定の國庫収入を納めるには餘程の佛下を爲さなければならなかた、最近に於ては木材の騰貴は著しいと同時に其の需要も並大抵ではない、爲めに豫定の拂下を爲さずして所定の収入を納めることが出來る、卽ち政府は國有林から一ケ年七千万圓の収入を仰いで居る、故に旋ては年一億圓に達し政府の重要財源となるであろう云々

と、この話の終る頃、漸く美女坂の峠、稱見晴の利く所に達した、殿下には金井事務官の氣息端々たるを顧みられて『金井如何だ』との御言葉に微笑をさへ洩させ給ひ御機嫌最と麗はしかつた、此所迄は未だ落伍者を見なかったが金井君の足が聊か胡散と見えて荐りに落伍者の班に列せしめない樣に妥協を申込み**キヤラメル**を分與した

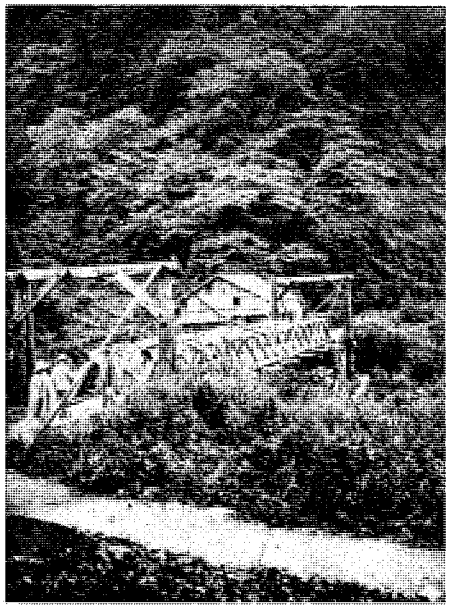
「高岡新報」が報道する「東久邇宮殿下　隨伴記」であるが、「隨伴記（三）」以降はいずれも第１面に掲載されており、新聞社としても需要な報道であったことがうかがえる。

２－３では、東久邇宮の称名川に比べなぜ常願寺川が濁っているのかという質問に対し、近藤技師が常願寺川の治水の現状について説明している。立山砂防工事は、富山県が明治39年（1906）より20か年の継続事業として着手したが、大正８年及び11年の豪雨によりことごとく崩壊した。大正８年は、豪雨のため多枝原谷が大崩壊を起こし、土石流のため県営白岩堰堤が流亡している。東久邇宮が質問した常願寺川の濁りはこの影響であると考えられる。なお、この砂防工事は大正15年からは、政府直轄工事に移り、現在に至っている。

弘法大師空海の故事にちなんだ名称の藤橋については、写真②の通り明治期までは吊り橋であったが、写真③の通り大正初期には、頑丈な橋に架けかえられている。写真③は大正12年（1923）８月12日発行『大阪毎日新聞日曜附録』にある藤橋の写真である。



写真②　明治期の絵葉書「越中立山　藤橋」



写真③　『大阪毎日新聞日曜附録』より

一行は、藤橋で休憩の後、黄金坂、草生坂、美女坂と急峻な坂（立山本道）を登っている。あまりの急坂のため体力的に厳しくなった金井事務官を気づかう東久邇宮であるが、この時栄養補給を兼ねてキャラメルを分与したとある。

キャラメルについては、実は下の新聞広告のように、当時の新聞には登山を題材とした広告が頻出している。例えば、大正15年７月15日付「富山日報」には、「山岳禮賛の道者に捧ぐ」と題して森永ミルクキャラメルの広告が大きく掲載されている。他にも「山に行くならキャラメルを…」、「登山者曰く…路ある山は大概森永のキャラメルのサックが落ちている…」、「登山必携　森永ミルクキャラメル…」などのキャッチコピーが広告欄を賑わしている。キャラメル以外にも広告の対象となった商品は、目薬や仁丹、葡萄酒、ビール、石鹸、味の素、仁丹など多岐に亘っていた。このような登山を題材とした商品広告は、単に登山者へのアピールにとどまらず、登山への憧れを誘い、さらに登山そのものが商品販売と密接した社会事象であることをうかがわせるものである。

「富山日報」大正11年７月29日

「富山日報」大正15年７月15日

２－４　▼東久邇宮殿下　隨伴記（四）　坂口弩水　　「高岡新報」大正８年（1919）８月８日　１面

▲殿下は此所に御休憩中種々と御感想を漏された、對岸『原』の高原が雑草の繁茂に委してあるのを惜まれて放牧場を設置したらば如何かとの御意見も其の一つであつた、近藤君はオロロと稱する虻の一種が猖獗し牛馬は勿論人間と雖も一度之が襲來に遭遇する時は忽ち殪れなければならない由を申上げた、それから御感興深かりしものか殿下には親しく一葉の寫眞をものし給ひたる後ち御出發、千古斧鉞を加えられない山毛欅の密林から吹き來るソヨ風に涼を取らせられ谷間に囀る鶯の音を聞召されつゝ進ませらる

▲此所からは山道稍平らかなれども夜來の雨にて泥濘糊の如く杉木大尉等は辷ること數回、爲めにアベカワ大尉の稍號を贈る者すらあった、又た金井事務官も殿下との間隔次第に生じて禿杉の邊りにて約四五町に達した、殿下には御疲勞の御氣色もなく記者に對し何隔てなく御言葉を賜ひ『昨年の演習の時

御前が從て居たな、那の時寫眞を撮って呉れた人は御前の社だつたネ、彼はまだ居るか、能く撮れて居た、寫眞を送つて呉れたが皈つたら禮を云って呉れ』等と昨年秋季の機動演習に隨伴申し上げたる際の御記憶を呼び起し給ひ我社寫眞技師倉田長太郎に對し斯くは難有き御言葉を給ひたるなりき

▲仮安坂の附近にては『知事が登山の際沈黙した坂は此の坂か』との御下問あり、旋がて欅平の茶屋に御着、醤油で煮出した様な呉座の上に御忌えもなく御腰を休め給ひ四十五六歳の婦が垢染みた衣類を着て何等の飾氣もなく湯垢付ける湯呑に溢々と注いで差出した茶を召され、『一杯三錢か、成程甘露の味だ、モ一杯貰はう』とて三杯も重ねさせられた婦は恐らくは殿下なるとを知らないのであろう

▲夫れは無理からぬことで御服装等は只だ見る一般登山者と何等變つた所がなく金井事務官のスタイルが數等勝つてゐる、又た杉木大尉が軍服で登った爲め往交ふ人は多く此の両者を殿下と間違えて最敬禮を爲した、御休憩約三十分再び御出發、相變らず殿下の御歩調早き爲め十五七町も進ませられた頃早や一行の足遅れて二隊となり前隊は近藤君、佐伯立山村長、殿下、祖式属、記者の五名である、桑谷の谷川で水を喰ふとした記者に對して『今少し上流の方を汲んで飲め、飲んだら氣付でも遣つて置け』との御注意を畏ふした

２－４の「隨伴記」には、「仮安坂の附近にては『知事が登山の際沈黙した坂は此の坂か』との御下問あり、…」とある。これは、東園知事が自ら幣帛供進使（奉幣使）として立山の峰本社に参拝した時のことだが、大正８年７月29日付「北陸タイムス」によれば、「◎雄山の神霊－崇たかなり＝奉幣使一行の危難」の見出しで、最初は元気だった一行が、草生坂、黄金坂、材木坂と連続する急峻を登るに従って気力を失い、ついに誰も言葉を交わさなくなったと報じている。そのときの東園知事の言葉が「…『又沈黙坂にさしかゝつたナ』者共続け続けと先頭に立つて士氣を鼓舞し…」である。ちょうど仮安坂のあたりと考えられる。ちなみに「仮安坂」は、吉澤庄作の『立山』には「…有頼此地に來りて遠くに響く勝妙瀧（稱明瀧の古名）の、さながら稱名念佛の聲の如く美妙に響けは容易く登り得たりとて名つけたりと。」と記されている。さらに、かりやす坂からは「桑谷に向かふ。小屋ありて茶菓を鬻ぐ、亦宿泊の便がある。此地は芦峅寺と室堂との中間各四里の地にありと稱せられ、往昔は此地に中室の建築ありて登山者の宿泊に便せられた。傍の小溪には清冽の水がある。」と続く。『立山』によれば、大正14年当時ブナ坂には「ブナ坂茶屋」と「ブナ小屋」があった。ブナ坂茶屋は、夏季のみ設置される小屋掛六坪程の建物で25名収容とある。「隨伴記」の通りお茶や菓子などを販売していた。また、ブナ小屋は、主として冬季のみ使用する木造２階建て三坪の県営の施設で15名収容とある。人は常駐せず炊竈用具一式及び軍用ストーブありとのことだが、寝具や食料はあらかじめ準備を要するものとなっており、緊急避難的な小屋と考えられる。

２－５　▼東久邇宮殿下　隨伴記（五）　坂口弩水　　「高岡新報」大正８年（1919）８月９日付　１面

▲斯くて正午頃彌陀ケ原なる弘法の茶屋に着いた、殿下は此所に御晝餐あり、午後一時御出發、廣々として際限なくシカモ高山植物の咲き誇つた彌陀ケ原は眞夏の光を浴びて彌が上にも平和の色を漂はせて居る、殿下には此野こそは放牧場に適當であらうぞと仰せられた、近藤技師は馬や牛の放牧を思つて居たと見え『降雪の關係や途中が險難で到底不可能でありませう』と申上げた、然るに殿下より『瑞典等に飼養して居る羊を放養したらば如何？』との反問を下された、コレには近藤君も聊か恐縮の態であつた

▲それより一の谷の峻坂を下り獅子ケ鼻の斷壁を攀ぢさせ給ふたが此所にて始めて殘んの雪を發見した、記者は試みに金剛杖の先端にて破片を求めて舐ぶつた、殿下は目敏くも之を御認めになつた、『其の雪を少し』と御所望あらせられた、記者の恐懼直ちに谷に下り一塊の純雪を得て捧げた、然し其の雪は稍大塊であったので、祖式属は之を割って進め參らせんとて杉木大尉の軍刀を借受けた、所が雪塊は殿下の御手の上にある軍刀の切先を殿下に向け奉ることは恐れ多いのでこれには祖式属も暫時困惑の

態であった
此の時殿下は『差支ないから割れ』との御言葉に力を得て漸く見事刀を下したが其の間の光景には記者も冷汗を握った
▲獅子ヶ鼻の嶮所にて隨伴申上げた一行中に此の千仞の谷に臨んだ鼻端に達したものは只だ梶川巡査のみであった、然るに殿下は依然として最先端なる衣掛の松の傍迄で御歩を運ばせ給ひ直立の姿勢にて四顧遊ばされ對岸の絶景をカメラに收め給ふなど御勇壯のほど感じ參らすのみであつた
▲祖式属の談に依ると殿下は非常に御研究心が深いので浮々と御説明申上げると種々御質問遊ばさるゝので時々困ることがあるが、天狗平の邊にて金井事務官に對し先年殿下が白馬御登山の際扈従申上げたと聞いたから立山との比較を質すと『**白馬は約彌陀ケ原位の標高にある、大町迄は自働車で行けるが第一日のキツカケに一里半許の大雪谿を攀ぢんければならない之が立山より非常に困難な所で殿下は此の時も常に先頭に立たせられた**』と語った、殿下は金井氏の此語尾を受けさせられて『**那の雪谿があるから立山より樂なのである、金井はアノ時落伍したナ**』とて哄笑遊ばされた
▲鏡石を何時の間にか通過ぎて大谷に差し蒐つたのは午後五時頃、來し方の山々は脚下に起伏して折柄の夕陽を浴び綿を千切つて投げた様な白雲は此所彼所に浮動して居る、往手遙かには別山立山、淨土山が屏風を立てた様、更に左の方には劔の峻峰が藍色を帶びて屹然天を戴つて居る、此の時室堂から御出迎の神職二名は御酒とお結飯とを提げて來着した、時刻は丁度お誂向きである、殿下もお附の一行も賞味したる事勿論である

「隨伴記」の通り、大正８年７月30日午前４時頃に芦峅寺を出発した一行は、正午ごろに弥陀ヶ原の弘法の「茶屋」に到着した。途中の休憩時間を含めて芦峅寺から弘法茶屋まで約８時間の行程である。この「茶屋」で、１時間昼食休憩した後出発している。大井冷光の『立山案内』（明治41年発行）には、登山案内の項に「…更に進みてさゝやかな不動堂の前に出づ、山毛欅坂より此處迄一里と稱す、尚數町にして茫たる高原彌陀ケ原に達す、**笹を葺きたる一小茶店あり、弘法茶屋**といふ、此處にて番茶を啜りて、再度の英氣を養ふべし。」と記されており、小屋掛けの茶屋があったことがわかる。ただ、大正14年発行の『立山』には、「…弘法小屋である。學習院學生岡部氏等の寄贈に基く者で、主として冬・春季に於ける彌陀ヶ原スキー練習の便にせん爲のものであつた。夏季登山期中は常に人がありて諸種物資の供給に努めてゐる。…」と記されている。木造２階建て約18坪の建物で60人収容の弘法小屋であるが、大正12年１月におきた板倉勝宣らの松尾峠遭難の後、學習院の岡部達が中心になって小屋をつくり寄付したものと推察される。弘法小屋及び弘法茶屋については、さらなる調査が必要である。

金井事務官が、白馬登山との比較として「…大雪谿を攀ぢんければならない之が立山より非常に困難な所…」と語っているが、東久邇宮は「那の雪谿があるから立山より樂なのである…」と反論している。東久邇宮はこの時32歳であるが、ここからも健脚ぶりがうかがえる。

「隨伴記（五）」は、大谷到着が午後５時頃で、神職２名がお神酒とお結びを持参してお出迎えをしたと記す。途中の茶屋では皇族と気づかれなかった東久邇宮であるが、室堂詰めの神職には事前に知らされていたのであろう。

２－６　▼東久邇宮殿下　隨伴記（六）　坂口弩水　　「高岡新報」大正８年（1919）８月10日付　１面

▲室堂は最う見える、雨雲の徂徠何となく急を告げて來た、殿下の促し給ふ儘に或者の如きはお握飯を食ひつゝ歩み出した、途中殿下は東京の聯隊に在せし當時函根の嶮を夜行軍にて踰え給ひて豪雨に遭ひし御感想を御物語遊はされたが、紫電縱横、雷は下方より上方に落ちたとなど非常に珍らしく御拜聽申上た、室堂に御着あらせられたのは午後六時、直ちに神職の室に隣つて設ひられた幄張の中へお這入になつた、其所は當夜仮寢遊ばさるべき御寢室であるが一般登山家と何等選ぶ所がなかつた御床は莫蓙

を敷た上に設けられた蚤の來襲を防ぐために蚤取粉を一面に撒かれた

▲夜の闌くるに連れて寒氣は增した、屋外は荒模様となつたらしい八時頃でもあつたろう、九人連の一行が登山の途中道を踏み迷つて漸く室堂に到着し、其一人は寒氣と飢餓と疲勞にて人事不省に陷り詮方なく十町許り下手に横臥せしめ樹の枝を折掛けて來たとの報告があつた、之を聞し召された殿下には非常に御同情あらせ給ひ『早く助けて遣れ』との御言葉に三人の強力が直ちに夜道を辿つて馳せ下つた、時は次第に進んだが何んの便もない、更に三人の強力を出して漸く連れ皈り殿下に扈従した平山醫師の應急手當で一命を取止め得た、殿下は蘇生をお聞ありて漸く睡りに落させられた様である今暫くで立山の鬼となろうした男は東礪波郡出町杉木新稲垣榮吉（四七）であつた、金井事務官の如きは荐りと同行者の無情を攻撃した、當夜の室堂は殿下お泊りといふので流石に靜肅であつた、

前述の通り早朝４時に芦峅寺の佐伯静邸を出発し、室堂到着は午後６時であった。食事や休憩時間を含めて約14時間という時間は、当時としてはごく一般的なものと考えられるが、現代の我々の感覚からみれば、決して気軽なレジャーではない。ただ、登山は皇族も楽しむ健全にして高尚な活動であり、山岳が決して危険な場所ではないという強いメッセージにはなったのであろう。とはいえ、一般大衆にとってはまだまだ気軽に楽しむというような登山環境ではなかった。

この東久邇宮稔彦王の山行が皇族として初めての立山登山と言われているが、山上での宿泊は一般の登山者と同じ室堂である。「隨伴記」の通り、幕で仕切ってはあったようだが、床に莫蓙を敷いただけの仮の寝室であった。普段は、大変な喧騒の室堂だが、東久邇宮が宿泊とのことでこの日はさすがに静粛であったと記されている。

２－７　▼東久邇宮殿下　隨伴記（六）※(七)の誤りか　**坂口弩水　「高岡新報」大正８年（1919）８月11日付　１面**

▲室堂の夜は次第に更けた、颯がガタガタと大戸を搖がして過ぎ去つた後には大粒の雨がバタバタと見舞って來た。寒いこと吹雪の夜のやうである、扈從の一行は殿下の寢所と只だ幕一重を境に薄暗い蠟燭の光を受けて雜魚寢をした、殿下にも勿論記者等と同様洋服も脱かせ給はず其の夜は仮寢の夢路を辿らせられた、旋がて午前二時半お粥と薊の味噌汁が出來た頃お眼覺めになつた殿下は直ちに之を召させられた

▲御發足の準備全く整ふて室堂を御出ましになつたのは丁度三時半正面に兀然端座して居る立山も右方に屹立して居る淨土山も左側に侍する別山も齊しく未だ夜の幕の中に靜かに眠って居る、雨は霽れたが雲は魔の如く此所彼処に簇生して吹き來る風は肌を削る様、一行は神官の手にした提灯の光を嚮導として殿下を御先頭に進んだ、幾つかの大雪谿を横ぎつて灰色ずんだ立山へ驀然に向ふ、一の越で暫時憩ふた後ち黑部谷より吹き來る凜乎たる暁嵐を犯して一氣に五ノ越を突破した、時に午前正六時殿下には此所に設けられた小祠にて神職より**修祓**を受けさせ給ふ

▲一行勢揃を俟つて更に攀づること五六丈、絶巓雄山神社に詣でた此の時殿下には親しく祭粢料をお供あらせられ神職の祭詞朗讀の後ち御拜禮遊ばされた、一行も引續き禮拜して参拜の儀が、滯りなく終ると殿下の御許を得て一同東方に向ひ近藤君の發聲で　天皇、皇后兩陛下並に東久邇宮殿下の萬歳を三唱した、一行僅かに十名の口から發した其の聲も赤誠が籠つて居た爲めに立山連嶺に山彦して雲表に聳ゆる　山々に　其の餘韻を傳へた

▲折柄雲霧を彩って差昇る**朝暾**は東方の山々に光を投げた、夜は已に開け放れた、**渺茫**たる日本海は**寸晁**の下に集って佐渡ケ島は水天の間に浮んで居る、靄を拂つた能登半島の全景等實に雄大無比である、殿下には玉跡を駐めさせ給ふこと約三十分、この間神職は西方漠々たる白雲の上に巍然として聳え立つた白山や東方或は南方に嶄然として頭角を抽で居る白馬、乘鞍、御岳、藥師其の他日本アルプス一帶の秀峰峻嶺を一々指呼して御説明申上げた

▲殿下には富士や淺間は白雪を戴いて只だ山脚のみを望み得たのであるが、近くザラ峠や針木峠の邊り、果ては呼はゞ應と答へ相な越中の平原、川の流れ、汽車走る態、汽船の航く景に最と御感興、御滿足の態に拜察し奉つた、記者は絶頂の御英姿を撮し奉るを以て無上の光榮としてお許しを得た、下山の途中佐伯村長は裏手の斷崖を下って黒百合二株を根扱にして殿下に奉ったが非常に御喜びになつた、尚ほ御手づから車百合等を御採取遊ばされた、次で一行の憩へる態を御覽ぜられ御興の向く儘磊々たる巨巖を背景に『皆其所に居れ記念に寫眞を撮って遣る、技師が下手だから眞黒になるかも知れないぞ』とてシヤツタをお切りになつた、一同は光榮之に過ぎずとて荐りに金井事務官に對し一枚宛御下賜の奏請方を願つて居た

修祓（しゅばつ）…祭典において、神さまをお招きする前に心身の罪穢（つみけがれ）を祓うこと。
明治時代の尺貫法では、1尺＝（10／33）メートル（＝約0.303030 m＝303.030 mm）と定義
1丈は約3.0303メートル＝3030.3 mm
朝暾（ちょうとん）…朝日。朝陽。朝旭。
渺茫（びょうぼう）…遠くはるかなさま。広く果てしないさま。
寸眸（すんぼう）…小さなひとみ。または、目。

この日（7月31日）、東久邇宮は午前2時半に起床し朝食をとった。そして、まだ夜明け前の午前3時に室堂を出発している。一行は神職の提灯を嚮導として、東久邇宮を先頭に一路雄山へ向かった。途中一ノ越で休憩し、五ノ越には午前6時に到着。五ノ越の小祠で修祓をしたとある。当時、一ノ越下の祓堂があったかどうかは確認できなかったが、このときは五ノ越でお祓いをうけてから頂上社殿へと登っている。なお、当日7月31日の立山山域における日の出時間は、午前4時40分頃であり、一行は一ノ越から五ノ越へ向かう途中でご来光を見たと推測される。ちなみに、室堂小屋から雄山山頂までの現代における一般的な所要時間は、上り2時間、下り1時間40分である。

東久邇宮が眺めた雄山山頂からの景色については、呼べば人が答えてくれるほど近くに見えた富山平野や、各河川の流れ、また汽車が走る様子など他の山々とは違う部分に感動し満足したと「隨伴記」に記されている。能登半島や佐渡島、白山や北アルプスの山々の景色なども素晴らしいが、平野部の様子が手に取るようにわかるところに東久邇宮は深く興味を覚えたようである。

2－8　▼東久邇宮殿下　隨伴記（六） ※（八）の誤りか　**坂口弩水　「高岡新報」大正8年（1919）8月12日付 1面**

◇午前八時、室堂に御歸還の殿下は一行と共に炊掛の飯、鷄と薊の汁に舌鼓を打たせ給ひ御少憩の後ち九時室堂を御出立遊ばされた、今日も殿下日和とでも謂ふか無上の快晴である、試みに平山醫師は寒暖計を地上に横へて觀測した、**攝氏三十八度九分**といふ高溫を示した、先づ神職の案内で御順路を地獄谷に向けられ綠ケ池やみくりケ池に就て迷信的のロマンスを申上げた、噴火口の死滅に依つて生じた池で等と學術的の解決を與へた者もあつたが此の神秘的な池に臨んでは何等の印象をも殘さない夫れより神職の口よりお伽噺の樣な佛事に因んだ勸善懲悪の話が面白く物語られた、地獄谷では各所から硫氣を吐出して居る態に殿下は『函根の地獄よりは範囲は非常に大ではあるが形狀は同一だ』との御言葉を洩れ承はつた

◇谷に下る迄もなく中腹を横這に道なき所を落葉松や岩角に縋つて足場を求めつゝ進む、大谷の邊にて御少憩の砌雷鳥の番が二三羽の鶉を連れて殿下の御側近く進んで感興を添ひ奉つた、御見送の神主は鏡石まで奉送申上げ一行は此所から追分茶店道を辿った、道は丈なす熊笹や白樺等で蔽ひ被つて薄気味悪い、概して下り一方で併も三十度位の坂であるが角磨のしない岩石の上を飛んで行く爲に一行の悉くは足の裏を損じた

◇殿下は依然先頭に立せられ自ら靴に縄を巻かせ給ひて辷りを防がせられつゝ此不愉快な坂を進ませられた、途中姥ヶ石を御覧ぜられ餘りの諧謔に思はず微笑を洩し給ふた、斯して三里の坂を僅か一時四十分間で下り給ひし殿下の御健脚には恐縮の外はなかった、正午過ぐる十分追分茶屋に御着金井事務官の兵站部が到着を待つこと霎時此の時名古屋市生れの者で七十の高齢を以て人の背に負はれ來るのや父親が十歳に満たぬ子供を二人伴ひて此の嶮山を攀づるの一行や或は妻娘四人の一家族が参詣の目的を達して皈途に就ける態等を御覧ぜられ一々名前を問はせ給ひ、年齢を質さしめられた、晝食後直ちに後出發、後續隊は憩ふ暇もない、此所から温泉道を辿らせられたが名にし負ふ松尾坂の嶮所も温泉の質や附近の山容に就き説明を聞召されて御通過、温泉場からは奉迎の幟を立てゝ御出迎へした、縣からは更に羽根警部が奉迎申上げた、午後三時半温泉場前に整列した浴客、砂防工事人夫等三百餘名の奉迎者に對し一々**御食釋**を給ひ些の御疲勞の御色もなく御元氣にて設けの御旅舍入らせらる。

攝氏三十八度九分 → 直射日光にあてたためか？
御食釋 → 御會釋の誤りか？

一行は午前３時に室堂を出発し、途中一ノ越で休憩、午前６時五ノ越にてお祓いをしてから頂上社殿に向かった。山頂で30分ほど過ごし、午前８時室堂に帰還。室堂から雄山山頂まで休憩を含めて往復５時間の行程であった。朝食後午前９時に出発し、地獄谷や緑が池、みくりが池に立ち寄りながら立山温泉へと向かう。地獄谷周辺では随行員の学術的な説明よりも、神職のお伽噺の様な仏事に因んだ勧善懲悪の話の方が興味深かったようである。神仏判然令及びその後の廃仏毀釈の嵐から半世紀がたった大正８年、立山の宗教者は政府の政策に翻弄されつつも、立山の信仰をしっかりと継承している。

その後、大谷を経由し鏡石、姥石に立ち寄り、正午過ぎに追分茶屋に到着した。「随伴記」に「…谷に下る迄もなく中腹を横這に道なき所を落葉松や岩角に縋つて足場を求めつゝ進む…」と記された通り、とにかく登山道が整備されておらず、不愉快な道であったようだ。当時の新聞記事にも、立山は白馬に比べ雄大ではあるが道が悪いとの東久邇宮の感想が報じられている。全国的に登山ブームが起きつつあった大正８年においても、立山では道の整備が喫緊の課題であった。

ただ、登山そのものを楽しむ人々は確実に広がっている。「随伴記」には、人に背負われて登ってくる名古屋市生まれの70歳の老人や10歳にも満たない二人の子供を連れて登っている父親、また参詣の目的を果たした妻娘４人家族が帰途につく様子なども記されており、幅広い層が立山を訪れている。

なお、吉澤庄作著『立山』によれば、遅くとも大正14年には追分に、木造平屋建ての「追分小屋」があった。約５坪で20人収容、大阪朝日新聞社の寄附によるものと記されている。夏季のみ物資補給のための人がいた。ただし、大正８年当時はブナ坂茶屋のように夏季のみ仮設される茶屋だった可能性がある。

この追分から松尾峠を下り、立山温泉へと一行は向かった。午後３時に到着したが、東久邇宮一行の出迎えに浴客や砂防工事の人夫等総勢300人以上が整列したとある。安政の大地震や明治維新による混乱で一時的に衰退していた立山温泉であるが、大正８年当時は、砂防工事のおかげもあって、東久邇宮を迎えるために300人以上が集合できるほど賑わっていたことがわかる。

２－９　▼東久邇宮殿下　随伴記（七）※(九)の誤りか　**坂口弩水　「高岡新報」大正８年（1919）８月14日付　１面**

◇立山靈泉は一浴已に一行の疲勞を忘れしむるに十分であった、候は秋日和、川向ふの原には萩がポツポツ耻かし氣に咲き初めて居る大鳶邊の雪原から吹送る涼風は湯上りの肌を嬲つて魂は忽ち華胥の夢路を辿らしめる、殿下は暫時午睡を貪ぼらせ給ひたる後ち御一浴、同夜の歡待は遺憾なく盡された、旋て午後九時頃でもあつたろう、殿下は今回扈從申上た一同に對して酒饌料を賜はつた、記者も亦た其の光榮に浴した、

◇翌くれは午前四時、朝餉を終つて館前に整列して殿下の御出ましを俟つた、程なく御英姿を現はされたので近藤技師は一同を代表して昨夜の御禮を言上した、次で温泉場主杉田八郎左衛門、同夫人其の他に拜謁を賜はつた、更に同温泉場の店員で上新川郡舟橋村生れ杉田増榮及び浴客なる中新川郡西加積村谷川清次の兩名に對して拜謁の御沙汰があつた、此の両名は四十二年近衛第三聯隊へ入營した際、殿下の麾下にありし昔を偲び奉りて前夜御旅行の夜警に當つたからである、記念の爲め松を御手植遊ばされたる後ち御出發、湯川に沿ふ道は過般の豪雨にて見る影もなく破壊せらてゐた、碧潭巖に激して玲瓏玉と碎くる邊を川原傳へに下り、此所彼所の岩間から溫泉の湧出を見る、この附近一帶の砂防工事は人事の威業であつた併し自然の夫に打勝つことが出來なかった、而して一夜の雨に美事根底から打ち壞されてゐた、殿下の御質問も近藤君の説明も自ら此所に關するものであつた、殿下よりは種々御下問ありたるも山脚に咽ぶ鞳々の響に掻消されて洩れ承ることが出來なかった、

◇記者は金井事務官を經て殿下今回の御登山に對する御感想**（二日夕刊所載）**を拜聽申し上げた、最難所たる鬼ヶ城の大缺所を過ぐれは道は坦々砥の如く、路側の密林には蟬時雨して絶えず脚下の流聲と響を競ふ、南畫にあり相な山の佇ずまい、懸崖至る所に百簾の飛瀑を掛けたる景は殿下の御旅情を慰め奉るに十分であつた、

◇斯くて御前九時半再び藤橋を渡りて橋畔の茶亭に御小憩、亭主は身に餘る光榮として豫て愛玩の高山植物『岩蓮華』を奉った、殿下には御嘉納あらせられた、御豫定の如く御前十時半芦峅寺佐伯靜方に御着、御召列車の聯絡時間もあればとて御晝餐も其所々々に御出發、途中同村一本松の茶屋より俥に召され沿道奉送迎者に御會釋遊ばされつゝ午後一時過ぐる三十分五百石町に御着、立山經鐵から滑川驛にて御召列車に御乘換の上御機嫌殊の外麗るはしく御皈還あらせられた、記者は高岡驛にて御奉送申上げたる際『疲れたであろう早く皈つて湯にでも入って休め』との最も難有き御沙汰を拜した。

＝《完》＝

華胥（かしょ）…昼寝。午睡。

近世に深美家（明治元年に深見と改姓）によって再興された立山温泉であったが、明治に入り経営は、深見家から杉田家へ移っている。大正８年当時は、舟橋村の杉田八郎左衛門が温泉場の主となっていた。

前述の通り、立山砂防工事は、富山県が明治39年（1906）より20か年の継続事業として着手したが、大正８年及び11年の豪雨によりことごとく崩壊した。大正８年は、豪雨のため多枝原谷が大崩壊を起こし、土石流のため県営白岩堰堤が流亡している。「隨伴記」にも「…湯川に沿ふ道は過般の豪雨にて見る影もなく破壊せらてゐた…この附近一帶の砂防工事は人事の威業であつた併し自然の夫に打勝つことが出來なかった、而して一夜の雨に美事根底から打ち壞されてゐた…」と記されているように明治大正期の砂防工事がどれほど困難であったか想像できる。

立山温泉を午前４時過ぎに出発した一行は、午前９時半藤橋を渡り茶屋で休憩している。『立山』には、大正14年当時藤橋周辺には「藤橋ホテル」と「藤橋茶屋」があり、200人内外の宿泊に応ずると記されている。東久邇宮一行は、この「藤橋茶屋」で休憩したものと考えられる。その後、芦峅寺の佐伯靜邸に午前10時半に到着。昼食後直ちに出発するが、芦峅寺の一本松の茶屋より「俥」（人力車）に乗り、五百石駅に向かった。午後１時30分に五百石駅に到着。立山鉄道（旧立山軽便鉄道）に乗車し、滑川駅にて御召列車に乗換へ、北陸線を金沢に向かった。

以上が、大正８年７月29日から８月１日までの３泊４日にわたる東久邇宮稔彦王による立山登山の詳細である。

まとめ

東久邇宮稔彦王による皇族初の立山登山について、「高岡新報」以外にも「富山日報」「富山新報」「北陸タイムス」など当時の県内の主要紙は大きく報じてはいるが、実際に随行記者を派遣し、９回にわたる随伴記事をほぼ１面で報じるなど「高岡新報」の取材は群を抜いていた。

なお、２－９の「随伴記」が「(二日夕刊所載)」と報じているように、大正８年８月２日付「高岡新報」には、「東久邇宮殿下 登山の御感想を漏さる　立山は雄大である　◎道路の嶮惡を難ぜらる　＝石室建設と道路の改修」との見出しで、東久邇宮の感想が掲載されている。記事には、「今回立山に登山して頗る満足である、曩に登つた白馬等と比較してみると男性女性と謂えば語弊があるが白馬の方は優美で親しみを有つて居る故に一度登つたら更に一度登つて見たい様な氣を起こさしめる、然し立山の方は非常に雄大である、が然し他の山々に比べて道が頗る悪い、近時登山熱の漸次勃興せんとする際なれば折角立山の登山を思ひ立つても那の様な難路では中途で中止するものがあるかも知れない、」とあり、早急な登山道整備の必要を述べている。これに、金井事務官が補足として、「故に或る程度迄は登山道路を改修し設備の点も富士山の如く各所に石室を設ける等多少完全し以て立山其の物の眞価を世間に紹介せなければならない、白馬や鎗(ママ)は殿下が御出になつた翌年から登山の設備を完全にして誰でも容易に登山し得る様になつた云々」と続けている。記事は最後に、金井事務官が「荐(しき)りに現在の道は人間の歩くべきで道路に非ざるを説けり」と結んでおり、大正８年当時の立山の登山道が他県と比べ、いかにひどい状況であったかが窺われる。このような状況の中、県もようやく重い腰をあげ登山環境の整備を推進していくことになったのである。

大正期には他にも４名の皇族が立山を訪れた。朝香宮鳩彦王、秩父宮雍仁親王、竹田宮恒徳王、北白川宮永久王である。大正期に大衆による登山ブームがおこり、多くの人々が楽しむために山に登った。その大衆登山ブームを形成する要因の一つが皇族登山であった。このような「山に登る宮様」の登場が、大衆登山ブームを膨らませた要因のひとつであるならば、立山を訪れた皇族の登山も登山史研究の重要なテーマであると考える。立山における皇族登山研究が今後の登山史研究の一助となれば幸いである。

＜主な参考資料＞

山と渓谷社編（編者布川欣一）『目で見る日本登山史』2005年
山と渓谷社編（編者遠藤甲太・池田常道）『日本登山史年表』2005年
學習院輔仁会山岳部・山桜会『山桜特別号「學習院登山史（Ⅰ）1887－1953」』2006年
布川欣一著『明解日本登山史』2015年
浅見雅男著『不思議な宮さま　東久邇稔彦王の昭和史』2014年
東久邇稔彦著『やんちゃ孤独』1955年
東久邇稔彦著『東久邇日記　日本激動期の秘録』1968年
東久邇稔彦著『一皇族の戦争日記』1957年
大井信勝著『立山案内』1908年
吉澤庄作著『立山遊覧』1922年
吉澤庄作著『立山』1925年
広瀬誠著『立山のいぶき』1992年
北日本新聞社編『立山とガイドたち』1973年
五十嶋一晃著『立山ガイド史』2013年
河田稔著『ある新聞人の生涯●評伝井上江花』1985年
富山地方鉄道株式会社編『富山地方鉄道五十年史』1983年

毎日新聞社発行『日本の肖像 第11巻 旧皇族・華族秘蔵アルバム』1990年
毎日新聞社発行『日本の肖像 第12巻 旧皇族・華族秘蔵アルバム』1991年
以下は富山県［立山博物館］特別企画展展示解説書
『もうひとつの立山信仰－立山信仰と立山温泉－』1992年
『ちょっと昔の立山登山－写真でたどる大正・昭和の立山登山－』2005年
『大衆、山へ―大正期登山ブームと立山―』2008年
『宮様、山へ―大正期登山ブームのなかの皇族登山―』2017年